海がきこえる

未来の野村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
海がきこえる

【Ｎコード】
Ｎ６７１５Ｌ

【作者名】
未来の野村

【あらすじ】
スタジオジブリ作品の海がきこえる二次創作です。

消えさるアイ

大学1年も無事に終わろうとしていた春先のこと、僕は学期末試験の勉強で終われていた。
勿論、単位があまりとれてい状況ではなかったが3年生の就活のことを考えながら単位は先にとっておこうと考えたのだ。

が――――
勉強ははかどる訳がなく、試験やレポートとにらめっこをしながらバイトで日程を消化していく、そんな穏やかな日時が過ぎていくものにすぎなかった。

昨年は
すごいことが
起きたから今年も何かが起きるのだろうと損をしない程度で期待をしていた。

流産した美加さんの件で里伽子とは進展があったかと思うと、それ以外は何もないのだ。

前より信頼が増したが恋愛の対象とはやはり何処か違うのだろうかそれとも良いように扱える、アッシーくらいに思っているのだろうか忙しい日の合間に「彼と彼女のこと」を考えるとイライラしてくる時もあった。

翌日、大学の抗議は早いところでは授業の感想に突入をしていた。僕は特に大学というところを毛嫌いしていたという訳ではないので適用（正確には妥当か）な評価を書いていたつもりだ。

友達には酷い奴もいて教授に恨みがあるやらないやらで最低な評価をつけていた。

「よーし、アンケートは誰かがまとめて教務課に持ってくるようにそれでは解散する…」

と同時に3年生と終われる集団が就職活動の話しをし始めた。

――――ねえ、ねえ木村先輩がブラック企業に入っちまってたんだってよお

ええ、でもブラック企業って人それぞれによって感じ方が違う訳だし

でも、それって入社したばかりの人の思い過ごしってよく聞くわよ

などと
世間話しを始めたが、今の時代はインターネットから噂を収集してこれる便利な
時代ではある……。

（ネットの噂なんて信用せんちゅうに…）

そう思って僕は早々とアンケートを教卓に起き教室を出ていった。

さてと、僕が携帯電話を持っていないという珍しい学生であるだろうということ
が理由なのか

しばらく連絡らしい連絡も来なく試験は終わり短い春休みに突入をした。

僕は里伽子のことも頭からすぅーと抜けていて
春休み中はバイトとヤクルトの応援三昧のつもりだった。

春休み初日の夜

プルルルと何処かかいつもより優しい電話の呼び鈴が拓の眠気を覚ましてくれた
。

心の中では眠りかけていたのにと悔しい思いをしたが電話を取り

受話器から

「杜崎か、久しぶりだな」

と懐かしい友人の松野の声がした。

「何や、松野か」

寝ぼけていると一発で解るような声であったので“何や、ねちょったな”とツッコミをされた。

僕が予想通りのリアクションをすると松野と僕はハハハと、気持ちよく笑う。

「ところでな杜崎、今度、高知でまた同窓会やることになったぞ」

「おおー。そりゃあええにゃ」

休みの度に「同窓会」を開くと久しぶりに会うという価値が落ちてしまうかも知れんが…と頭にもよぎったが詳しい連絡は後日、折り返しで松野から電話が掛かってくることになった。

その他には松野が彼女と上手くいっていることや彼女の好みなどを永遠と聞かされていたが津村知抄のことを松野に説明してやるのを忘れとった。

（まあ、よか……里伽子がいれば必然と
津村知抄の話しまでは解らんが美加さんとの話しにはなるやろう）

前回、夏休みの高知に“僕”が帰還した時に里伽子は予想外にも松野に家庭事情
をべらべらと喋ったのを思い出した。

ということを考えながら松野が“その年上の女たたるぞ”と別れ際に言ったこと
を思い出した。

そして同窓会の日取りも決まり、同窓会を数日後に控えたその時だった。

僕はバイトから帰宅をし読みかけのベースボールマガジンを片手に寝ていたらし
いが
受話器の騒音に叩き起こされた。

「はい…もしも、杜崎ですが……」

「あっ、もしも私、里伽子よ。拓、同窓会に出るの」

やけに明るい声が寝ぼけている頭には槍が突き刺さるかのようにずんずんと響き渡る。

僕はすかさず、今、何時やと聞き返した。

部屋が暗かったせいもあり丁度、時計が見れなかった。

「7時半よ。
寝ぼけてる声だけど、バイトかなんかあった」

「ああ、午前中あったぞ…で、何の用件か……同窓会か」

「そうなのよ。
今度は出れそうなのよだから空港までは一緒に行こうと思って電話をしたのよ、
拓は携帯持ってないから不便なのよね」

僕は今まで携帯番号を持っていないことに不便だとは思ったことがなくむしろ他
の学生達は何でそんな重たいものをポケットに入れて持ち歩くのかが理解できな
かった……。
大学の友達にこのことを話したら笑われたのをにわかに覚えいる。

「せやな、バイト代貯まってるき。
今度携帯番号買わなきゃな」

「よろしく、その方が助かるわ！
一応、私の番号を伝えておくね」

その発言を待ってましたというばかりに０９０という聞きなれない、
番号を声に出す
里伽子に圧倒されつつジャニーズ岡田の番号もきっちりと入っとる

んやろかと少
しだけ気になった。
高知の友達は会える機会がなかなかないので聞けないではいるだろうが…。

そんなこんなで高知へ出発の翌日は金曜日で荷物の整理を軽く済ませ神宮球場へ
ヤクルト戦を見に行った。
愛する我が弱小チームは、開幕したばかりにも関わらずにセリーグで断トツ最下
位であった。
この試合も館山が打たれ炎上をするという試合で
大学の※三村という東京育ちの東京生まれのバリバリのヤクルトファンという奴
がいるが一緒にがっかりした。チャンステーマもろくに歌えない試合であった。

そして出発当日は午前中に荷物を作り終え、高知に出発をした。
吉祥寺駅に向かい里加子と待ち合わせをしたが里伽子はバスの遅延で出発時間ギリギリについた。

「お待たせ、ごめんなさい。バスが動かなくて」

はあはあと
息を小刻みに切らし焦った里伽子が拓の目の前に現れた。

「まあ。ええよ。早く高速バスに乗るぜよ」

「そうしましょう」

吉祥寺駅中央口から羽田へと向かう
高速バスに僕らは揺られ始めた――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6715l/

海がきこえる

2010年11月12日18時51分発行